

本科 0 期 2 月度

解答

Z 会東大進学教室

早慶大英語



4章 総合問題4

問題

【1】

解答

④→③→①→②

解説

文整序問題では、代名詞、接続語句、論理展開を示す語句に注意して論理の一貫性を確認する。

言語機能について述べているのが③と④で、①と②はジェスチャーや顔の表情が持っている意思伝達機能について述べている。

書き出し文の後半は、「言語にはまた重要な知的機能があり、我々の周囲の世界をどう理解し、考えるかに影響を及ぼす」となっている。これをさらに説明しているのが④で、to categorize the world ... in our thinking は、書き出し文中の affects how we understand and reflect on the world around us とほぼ同じ内容である。For example もヒントになる。③は、④の to categorize the world ~ in our thinking を受けて、We must not underestimate the importance of ~ が続く。新しい言語を学習するのは新しい社会的背景の中に入ることであるから、そこでは新しい分類方法が必要となる。

① on the other hand（もう一方で）に注目する（これは書き出し文の on the one hand を受ける）。「言語が意思伝達の唯一の手段ではない」と述べ、言語そのものとは別の話題に転じ、ジェスチャーに意思伝達機能があると説明している。

②では、同じく「非言語コミュニケーション」である「顔の表情」の意思伝達機能について述べている。

全訳

① 意思の伝達と言語は非常に密接な関係があるが、それらは同じものではない。一方で、言語は我々が他の人々と意思の疎通をはかることを可能にするのみならず、言語にはまた重要な知的機能もあり、我々が周囲の世界についてどのように理解し、考えるかということに影響を及ぼす。

④ 例えば、我々は社会的な背景の中で言語経験を体得することによって、我々の周囲にいる人々と同じ方法で世界を分類するようになり、考える時にもこれらの分類方法を使うようになる。

③ このような分類するという側面が外国語学習者に対して持つ重要性を過小評価してはならない。彼らは新しい言語に出会うと、経験を識別する新たな枠組みと、それを使いこなす新たな方法に対処することを要求される。

① また一方で、言語は我々の意思を伝達する唯一の手段ではない。例えば、騒々しい状況では、我々は単純なメッセージを伝えるのによくジェスチャーに頼る。

② 同じように、お互いよく知っている人の間では、ちょっとした顔の表情が大いに影響

を及ぼし、その表情を伴う言葉の意味を完全に変えることがある。

② しかしながら、言語と意思伝達が別々に存在するとしても、それらがお互いにとても密接につながっていることは明らかである。子供の言語能力が発達するように刺激するのは、意思の伝達をはかろうとする欲求であり、また大人にとっても言語の最も重要な機能は、人々が他の人々と意思の疎通をはかるのに役立つことである。

注

①

ℓ. 2 ◇ on the one hand 「一方では」 2 者の対照を述べる。

cf. on the one hand A, on the other hand B

(一方ではAだが、もう一方ではBである)

on the other hand は①a)の中にある。

ℓ. 3 ◇ mental 「知的な」 < mind (頭の中の考える場所)

◇ affect ～ 「～に影響を及ぼす」

d)

ℓ. 12 ◇ social settings 「社会背景；社会的な環境」

◇ lead A to … 「Aを…する気にさせる」

◇ categorize ～ 「～を分類する」

ℓ. 13 ◇ in the same ways as ～ 「～と同じ方法で」

◇ category 「分類方法；識別の枠組み」

c)

ℓ. 9 ◇ underestimate ～ 「～を過小評価する」 ⇔ overestimate ～

ℓ. 10 ◇ encounter with ～ 「～との出会い〔遭遇〕」

◇ require A to … 「Aに…するよう要求する〔命じる〕」

◇ cope with ～ 「～に対処する；～を処理する」

ℓ. 11 ◇ manipulate ～ 「～をうまく処理する」

○主に問題や事件を処理する時に使う。

a)

ℓ. 5 ◇ Nor ～ is language the only means by which we communicate 「また、言語は我々の意思を伝達する唯一の手段でもない」

○ nor = and ～ not …, either

○直前の否定文を受けている。

○「否定の副詞 + V + S」の語順に注意。

ℓ. 6 ◇ convey ～ 「～を伝達する」 (= give ideas or feelings to ～; carry ～; transmit ～)

b)

ℓ. 7 ◇ a slight facial expression 「ちょっとした顔の表情」

ℓ. 8 ◇ it = a slight facial expression

◇ A accompany B 「A が B に伴う；A は B と同時に起こる」

②

ℓ. 14 ◇ even though ～ 「たとえ～でも」 ‘譲歩’を表す接続詞。

◇ separately 「別々に；単独に」

◇ be linked to ～ 「～と結び付いている」

ℓ. 15 ◇ It is ～ that … 強調構文。

◇ urge to … 「…したいという衝動」※この urge は名詞。

cf. urge A to … (Aをせき立てて…させる) この urge は他動詞。

◇ stimulate A to … 「Aを刺激して…させる」

【2】

解答

(1) ① a ② b ③ c (2) 「全訳」の下線部参照。

(3) ④ clear [central] ⑤ side [peripheral]

(4) 視覚能力の2割しか使われていない中心焦点という狭い視野に縛られず、多くが割り当てられている周辺視野を活用して脳の視覚技術を最大限に利用するべきであるということ。(80字)

解説

(1)

① 「それぞれの目の網膜には1億3千万の光受信装置がある」を受け、「つまり、それは合わせて2億6千万の光受信装置があることを意味する」という節をつなぐのは、前の節全体の内容を先行詞とする非制限用法の which である。

② 前の文意、すなわち「はっきりした焦点には目／脳組織のわずか20パーセントしか使われていないのに対し、周辺焦点には80パーセントもが使われている(こと)」を受けける代名詞は This。This means that … 「これはすなわち…ということである」となる。空所の後ろの動詞 means が3人称単数形になっているので a Both は入らない。前文の2つの内容それぞれが that 以下のことを意味しているわけではないので、b Each も不可。

③ c の in を入れて、in order to … (…するために) とすると、「必要なことにあなたの目を向けさせ、あなたを危険から遠ざけるために」の意となり、前とつながる。a an を入れると order は名詞ということになるが、文法的にここに名詞がくることはない。b but を入れても文意を成さないので不可。

(2) ○ Their vertical vision : their は前の people を受けている。vertical は「垂直の」の意。vision はここでは「視野」。

○ slightly shorter は主語が「視野」なので、日本語では「わずかに狭い」とするとよい。なお、shorter と比較級になっているのは、前文に出てきた水平方向の視覚との比較であるから、その意味合いを含めて訳すとよい。

○ but only because of ～ の部分は前で文を区切り、「…なのだが、これはもっぱら〔ひとえに〕～のせい〔ため〕である」と訳すとうまくつながる。

(3) 第4段落以降、focus (vision) に関して問題になっているのは 'clear' or 'central' focus と 'side' or 'peripheral' focus である。空所④を含む第6段落第1文の thus using ～ 以下で「その結果、利用可能な視覚能力の20パーセント足らずしか使って

いない」と言っているので、第4段落第2文で20パーセントしか使っていないと言っている clear [central] (focus vision) が空所㉔に入る。また第7段落では clear focus から脳を引き離れた見方の重要性が説かれているので、空所㉕に入るのは side [peripheral] (vision) である。

- (4) 第3段落までは人間の視野についての導入で、第4, 5段落では、中心焦点と周辺視野について説明されている。その内容をふまえて、第6段落では、これまでの読書術が中心視野のみ重視してきたこととその問題点が述べられ、第7段落で筆者の主張が展開されている。特に、最終文 Whereas most people ~ use the full range of their brains' visual skills. がポイントとなる。周辺視野の潜在能力を生かそうと訓練した読書家たちの例を挙げていることから、周辺視野を活用し、脳の能力を最大限に利用すべきだという筆者の主張を読み取る。

全訳

ヒトはしばしば、水平方向の視野は自分の両腕が伸ばせる範囲に及ぶことに気づく。それに比べ垂直方向の視野は若干狭いが、これはもっぱら眉の骨のせいである。

どうしてこんな広さになるのだろうか。

その答えはヒトの目の構造にある。それぞれの目の網膜には1億3千万の光受信装置が、つまり、合わせて2億6千万の光受信装置があるのだ。

目の何パーセントぐらいが「はっきりした」あるいは「中心の」焦点に、また何パーセントぐらいが「側面の」あるいは「周辺の」焦点に使われるかわかりだろうか。実際のところ、はっきりした焦点には目／脳組織のわずか20パーセントしか使われておらず、これに対し周辺の焦点にはなんと80パーセントもが使われているのだ。これはすなわち、ヒトの目の中で機能している2億6千万の光受信装置のうち、2億8百万以上が周辺視野に使われているということである。

周辺視野に対する割合がこんなにも高いのはなぜだろうか。その理由は、地球上の出来事の大半が中心焦点の周縁部分で生じているからで、必要なことに注意を向けて危険を回避するために、脳が周囲のあらゆる変化に気づいていることが人の生存に欠かせないからだ。

伝統的な読書教育の方法では、中心の「はっきりした」焦点視野のみを重視してきたのだが、その結果、利用可能な視覚能力の20パーセント足らずしか使わず、しかもそのわずかな比率さえも極めて不適切なやりかたで使うはめになっていた。

図書館員のアントニオ・マリアベキ (1633-1714)、哲学者のジョン・スチュアート・ミル (1806-1873)、そして大統領のジョン・F・ケネディ (1917-1963) のような読書家はみな側面〔周辺〕視野の持つ膨大な潜在能力を利用する訓練を積んだ。あなたも自分の脳をはっきりした焦点から切り離し、「心の目」でものを見ることで同じことができる。たいいていの人々が中心焦点という「視野狭窄」に縛られて人生を過ごすのに対し、より優れた読書家、思想家、逆境に強い人は脳に備わる視覚能力を目いっぱい活用するのである。

注

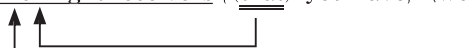
ℓ. 1 ◇ horizontal 「水平の」

ℓ. 4 ◇ lie in ~ 「(答えが) ~にある」

ℓ. 7 ◇ be devoted to ~ 「~に振り向けられて〔使われて〕いる」

ℓ. 9 ◇ while your peripheral focus has an amazing 80 percent : 「一方、周辺の焦点にはなんと 80 パーセントもが使われている」 amazing の訳し方に注意。

ℓ. 10 ◇ of the 260 million light-receivers {(that) you have} <working for you,> ~



(that) you have という関係詞節と working for you という形容詞句がともに the 260 million light-receivers を修飾している。

ℓ. 23 ◇ tunnel vision 「視野狭窄 (極めて狭い視野)」

【3】

解答

- (1) b (2) d (3) c (4) d (5) b (6) a (7) a
(8) a (9) c (10) b (11) c (12) a (13) d (14) b

解説

- (1) 「スティーブは、クラスでトップだと私たちが思っている少年だ。」
○ Steve is the boy. + We suppose he is at the top of our class.
- (2) 「彼の笑い方が気に入らなかった。」
○ the way S V 「S が V するやり方」
- (3) 「これが先日あなたにお話ししたブログだ。」
○ This is the blog. + I spoke to you about it the other day.
- (4) 「ベルギーとビールの関係は、フランスとワインの関係と同じだ。」
○ A is to B what C is to D. = A is to B as C is to D. 「A と B との関係は C と D との関係と同じだ。」
- (5) 「彼のケースは極端なので別として、大半の場合はこの法律が適用される。」
○ case を先行詞とする主格の関係代名詞 which。
- (6) 「パスポートを紛失した場合には、紛失した所有者は直ちに新しいパスポートを再発行してもらわなければいけない。」
具体的な場所でなくても、point, case, situation などのように、状況・立場・事例など‘広い意味で場所と考えられる語’が先行詞になる場合にも where が用いられることがある。
- (7) 「この寺は、京都に来たら必ず訪れなければならない場所だ。」
visit は他動詞であることに注意。a place を先行詞とする目的格の関係代名詞 which を入れる。
○ never fail to … 「必ず…する」
- (8) 「彼らの多くが、私の知らない何らかの理由で、私を見つめていた。」
why では「どうして私が知らないのかという理由」という意味になってしまい文意が通らない。reason を先行詞とする目的格の関係代名詞 which を選ぶ。
- (9) 「その時、父は私に、その存在を聞いたことがない兄弟がいると言ったのだ。」
I had a brother. + I had never heard of his existence. と考える。whom では直後の existence につながらず、what では意味が通らない。
- (10) 「そのタバコの吸い殻には唾液がついており、その唾液の DNA は被告人の DNA と

一致した。」

○ The cigarette butt contained saliva. + The DNA of saliva matched that of the accused.

- (11) 「この技術は、その新作をとってもリアルにしている要素の一部だ。」

makes の主語となる関係代名詞 what を選ぶ。

- (12) 「我々は、手に入る空間すべてを最大限に利用すべきだ。」

what は関係形容詞であり、「すべての～」という意味になる。

Ex. I gave him *what* money I had. (私は彼に持っているすべてのお金をあげた。)

○ make the most of ～ 「～を最大限に活用する」

- (13) 「このクーポンを使いたい人なら誰にでもあげよう。」

○ whoever = anyone who

- (14) 「この仕事を終わらせるために必要と考えるいかなる手段をも取るべきだ。」

○ whatever means you think necessary = any means that you think necessary

【4】

解答

- (1) She tried to avoid seeing me on some excuse or other.
(2) Sooner or later he will be made to pay for his stupidity.
(3) Cathy, who we had expected would drop out first, kept running the longest.
(4) My son seems to have lost interest in comics. Now he is into computer games.

別解 My son seems to have outgrown his interest in comics. He is now absorbed in computer games.

- (5) He is somewhat fickle. That's where I can't totally trust him.

別解 He has a capricious side. That's why I don't completely trust him.

- (6) Anyone who visits this town feels as if he (or she) had slipped into the past in a time machine.

別解 Every visitor to this town feels as if he (or she) had made a trip in a time machine into the past.

解説

- (1) 「彼女は私に会うのを避けようとした」 + 「あれこれ口実をもうけて」の2つに分けて考える。「会うのを避けようとする」は try, avoid, see を使う。

try は目的語に不定詞と動名詞の両方をとることができるが、「(できるかどうかは別にして) …しようと試みる」という場合は不定詞, 「試しに…してみる」という場合は動名詞になる。日本文から考えて、ここは不定詞の try to avoid にする。avoid は目的語として動名詞しかとらないので avoid seeing me となる。最後に「あれこれ口実をもうけて」は on some excuse or other とする。よって完成文は, She tried to avoid seeing me on some excuse or other. となる。

- (2) 「遅かれ早かれ」は sooner or later という慣用句を使う。日本語につられて sooner と later を逆にしないように注意。「自分の愚かさ」は his stupidity。「～のツケを支

払う」は与えられた語から pay for ～ (～に対して償いをする；～の罰を受ける) とする。ポイントは「…するはめになるだろう」だが, make が与えられていることに注目し, これを使役動詞として使うとうまくいく。his stupidity を主語にすると his stupidity will make him pay for it (= his stupidity) となるが, it が与えられていないこと, また to があることから, he の方を主語にして受動態の文で表し, he will be made to pay for his stupidity とする。よって完成文は, Sooner or later he will be made to pay for his stupidity. となる。

- (3) 文の骨格となるのは「キャシーが一番長く走り続けた」(Cathy kept running the longest) である。この Cathy を修飾している「真っ先に棄権してしまうだろうと思っていた」は「我々はキャシーが…だろうと思っていた」ということだから, We had expected Cathy would drop out first. のようになる。これらに関係詞を用いてつなげばよい。

Cathy kept running the longest. + We had expected Cathy would drop out first.

→ Cathy, *who* we had expected would drop out first, kept running the longest.

Cathy は Cathy would drop out ～ という節の主語なので, 関係詞で置き換えると主格の *who* になる。その *who* を先行詞の後ろに置けばよいのだが, 前にコンマを置いて非制限用法にすることに注意する。コンマがないもの(つまり制限用法)だと「真っ先に棄権するだろうと思われていたキャシー」と「そうではないキャシー」がいたことになってしまう。

- (4) 「漫画を卒業する」「漫画に興味を失う」と考え, lose interest in comics, または outgrow *one's* interest in comics のようにする。「…したようだ」は 'seem + 完了形の不定詞' として 'seem to have 過去分詞' の形を用いて表す。

「～に夢中である」be absorbed in ～; be crazy about ～ といった表現が使える。口語的な表現には be into ～ というものもある。

- (5) 「彼には気まぐれなところがある」「気まぐれな」は形容詞 capricious や fickle が適当。文の形としては「彼」を主語として He is somewhat fickle. や He has a capricious side. などが考えられるし, 他に There is の形を用いて There is something capricious about him. と書ける。これらの形容詞を用いないなら, 「彼は(言動において)一貫していない」と考えて, He is inconsistent in his behavior. や His behavior tends to change easily. などとすればよい。

「信用しきれない」は「全面的には信用できない」と考えて I don't [can't] totally [completely] trust him. のように「部分否定」で表す。

「…のはその点だ」関係副詞を用いて That's where … とする。これは That's (the point) where … がもとの形であるが, the point のような先行詞は一般に省略される。または「…のはその点だ」を「そういう理由で…」と読み換えて, That's why … としてもよい。why の先行詞は the reason であるが, これも同じく省略する。

- (6) 「この町を訪れる人は誰でも…する」は「この町を訪れる」が「人」を修飾しているので, anyone (誰でも) を主語にして関係詞節を続けて Anyone who visits this town … とする。anyone が単数なので節内の動詞が visits となることに注意。他に

は「この町へのすべての訪問者は…」と考えて Every visitor to this town … ともできる。

「過去に迷いこんでしまったように感じる」feel as if … の形にするのがよい。「過去に迷いこむ」は slip into the past や make a trip into the past。「過去に迷いこんでしまった」は have slipped into ～; have made a trip into ～ のように現在完了で表すが、ここでは「過去に迷いこんでしまった」のは事実ではないので、仮定法にする。「タイムマシンに乗って」in a time machine でよい。

【5】

解答・解説

- (1) which I thought it was a lie → which I thought was a lie (which → but も可。)
「ジョージは携帯電話を失くしたと言ったが、それは嘘だと思った。」
- (2) Whatever → However
「どんなにお腹が空いていようと、がつつ食べてはいけない。時間をかけて食べろ。」
whatever には複合関係形容詞の用法があるが、その場合でも名詞を修飾する。
hungry という形容詞を修飾するには複合関係副詞 However にする。
- (3) which → as
「知性を拡大するような本を学生たちには読ませよ。」
先行詞に such があるため関係詞は as (疑似関係代名詞) を用いる。
- (4) whose the roof → whose roof [the roof of which]
「あそこに屋根が見える家は、先生の家だ。」
You can see its roof over there. から。
- (5) whom を削除
「先日手紙で書いた教授は、去年フィールズ賞を取った。」
The professor が主語で、won が動詞となることに注意。

【6】

解答

- (1) Millionaire as [though]
(2) Unless
(3) (so) that, miss
(4) his [him] leaving the office at once
(5) It seems, my daughter (has) lost her way
(6) the criminal, be arrested quickly
(7) read this story without being moved to tears
(8) my stay in London
(9) will take you
(10) pride, allow her to ask others for help

- (1) 「彼女の父は百万長者だったが、決して金儲けの機会を逃さなかった。」
○ X as [though] S V, ~ = Though S V X, ~
- (2) 「あなたが自身のひどい行いについて謝罪しない限り、二度と口をきかない。」
○ 命令文, or S V. 「…しなさい。さもないと S V。」
○ Unless S V, 「S が V しない限り」
- (3) 「その急行列車に乗り遅れないように彼らは駅まで走った。」
○ so that S may [can ; will] … 「S が…するために」
- (4) 「ジョーンズさんは、彼が直ちにオフィスを出るように主張した。」
○ insist that S V = insist on + 名詞なので, leave を動名詞にする。
- (5) 「私の娘は森の中で迷ってしまったように思われる。」
○ It seems that S V. = S seems to ….
- (6) 「我々の大半は、その犯人がすぐに逮捕されることを期待している。」
○ expect ~ to … 「～が…するのを期待する」
- (7) 「この話を読むと必ず感動して涙が出る。」
○ never [cannot] ~ without …ing 「～すると必ず…」
- (8) 「ロンドン滞在中、オリンピックスタジアムに行った。」
○ during は名詞を取る。…ing は取れないことに注意。
- (9) 「この通りを行けば、ルーブル美術館に着きますよ。」
○ take A to B 「A を B へと連れて行く」
- (10) 「彼女はプライドが高かったので、他人に助けを求めることができなかった。」